

# 方言多用地域における理解困難点の整理と、その理解促進を目指した聴解教材の開発

吉里 さち子(熊本大学) 馬場 良二(熊本県立大学) 島本 智美(熊本県立大学) 和田 礼子(鹿児島大学)  
大庭 理恵子(熊本県立大学大学院) 田川 恭識(神奈川大学) 大山 浩美(アップル・ジャパン) 嵐 洋子(杏林大学)

## 1. はじめに

本研究チームは、熊本県熊本市を中心とした方言多用地域において在住外国人を対象とした方言教材の開発を行っており、これまでに入門書<sup>1</sup>、中級者向け教材<sup>2</sup>を製作している。現在、これらの教材をさらに発展させる形で、外国人がいつでもどこでも使用できるスマートフォンやタブレット対応のアプリケーション教材を開発し、外国人に寄り添う学習支援モデルの確立を目指している。

## 2. 方言多用地域における地域共通語

方言を多用する地域では、「方言のみ」でなく標準語と方言が混じり合った地域共通語が日常的に用いられている。地域共通語は語彙や表現だけでなく、音声や音韻の面においても、標準語とは異なっている。例えば、熊本県熊本市の地域共通語の音声面には、次のような特徴がある。連母音を含む「ない」が「にゃー」、「太い」が「フテー」、「きつい」が「キチー」、「買う」が「コウ」となる。また、語末のウ列音は「する」が「スッ」となり、促音化する。このように、同市における地域共通語では、音の長短が変わったり、促音化したりする例が多い。そのため、外国人や当該地域共通語に慣れていない日本語母語話者にとっても、地域共通語の理解や習得はたやすすくない。

本研究チームが熊本県熊本市在住の日本語学習者へ行った意識調査においても、全員が「方言は、標準語(教科書のCDやテレビの音声など)の聞き取りより難しい」と回答し、聞き取りの困難さを認識している。

コミュニケーションは、相手が発した言葉の意味を理解して初めて成立する。地域共通語でのコミュニケーションにおいても、聞き取る力を醸成することは地域社会での多文化共生社会実現のための必須要素であると考えられる。そのため、本研究チームは外国人の地域共通語理解のための聴解教材の開発に着手した。

## 3. 方言聴取における理解困難点について

聴解教材は、外国人にとって聞き取りが困難であると考えられる音声、待遇表現、文法、語彙をとりあげた。

音声面では、前述のとおり、「する」が「スッ」、「これが」が「コッガ」となる等、促音が多く表れる傾向にあり、もとの表現であれば理解できたはずの発話が促音化することによって、内容の理解に支障をきたしてしまうことが考えられる。

待遇表現としては、主に敬語の発達が挙げられる。尊敬語には、(先生が)「おっしゃった→イイナハッタ」「めしあがった→タベナハッタ」のような方言形式がある。動詞語幹に「-a す/らす」がついた「言う→言ワス」「食べる→食ベラス」は第三者の動作を描写する際に用いられ、敬意はあまり含まれていない。このように非常に複雑な構造をもつため、聞き取って、誰について話しているのかを理解することはかなり困難であると考えられる。しかし



図1 方言教材入門書『話してみらんね さしより!熊本弁』

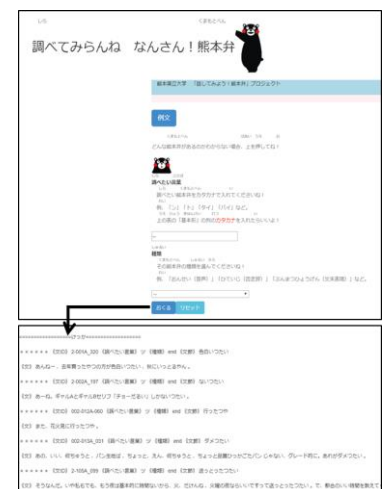


図2 中級者向け教材「調べてみらんね なんさん!熊本弁」

<sup>1</sup> <http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~iimulab/dialect/sasiyori/>

<sup>2</sup> [http://cl.naist.jp/~hiromi-o/cgi-bin/tag\\_extract.cgi\\_text3.py](http://cl.naist.jp/~hiromi-o/cgi-bin/tag_extract.cgi_text3.py)

ながら、日本人配偶者とその家族、あるいは、職場の人間が地域共通語話者である場合、このスキルがなければ日常生活や社会活動において、必要な情報が得られない事態に陥る可能性がある。

文法面では、特に終助詞やモダリティを中心とした文末に方言形式が多用される。終助詞には、ト、ド、タイ、ケン、バイ、ネ等、様々なものがあるが、それらが音調的特徴を伴ってどのように使用され、どのような発話意図を伝えているのかについて理解を確認する必要がある。

語彙面では、名詞の語彙はごく少数であるが、「とても→タイギヤ」「全然→イッチョン」等、程度や評価を表す副詞は頻繁に使用されるため、理解できるようになることが重要である。

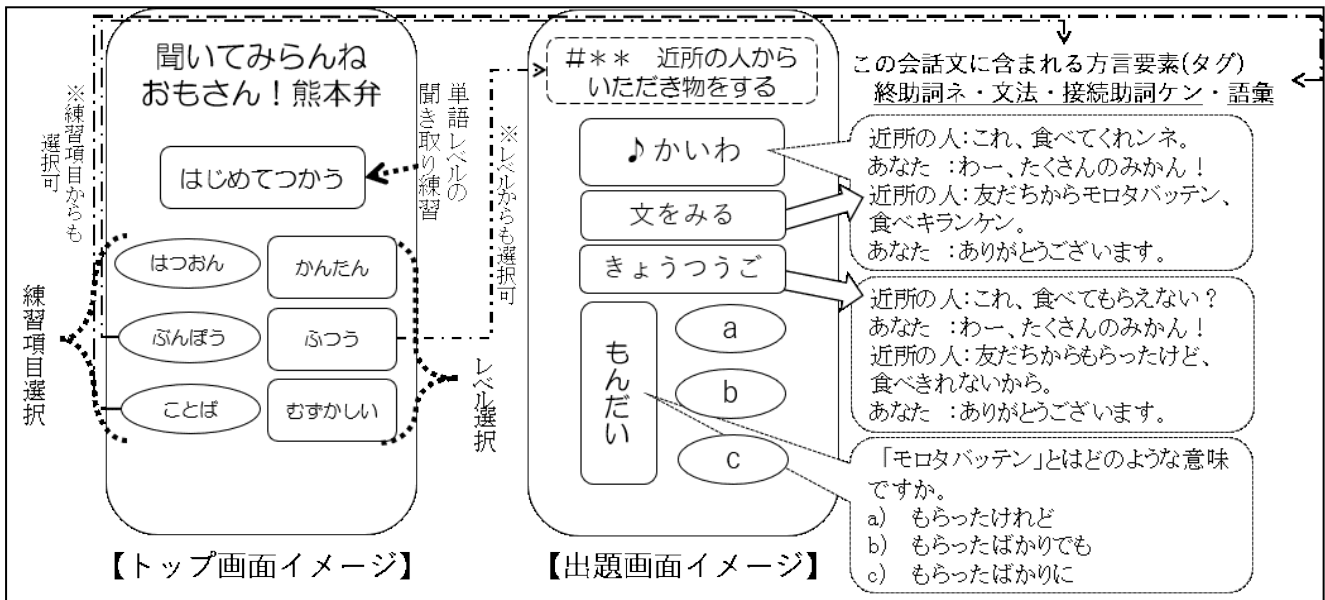


図3 聴解教材アプリイメージ図

#### 4. 聴解教材作成における注意点

聴解問題の作成にあたり、まず、日本人配偶者として生活している外国人女性が母、妻、嫁として、家族以外の人間から地域共通語で話しかけられたという場面を想定した。外国人女性が応答を必要とする場合は、方言や地域共通語ではなく標準語を使用し、地域共通語での発話を強要しないよう注意を払った。そのため、録音の音声も中心人物となる外国人女性は標準語話者、話しかける人物は熊本県熊本市の地域共通語話者がそれぞれ担当している。

#### 5. 聴解教材の全体像

聴解問題全体は、単語や短文の聞き取りのみの問題で音声的特徴についての知識を得てから、文法や語彙、待遇表現を織り交ぜながら、難易度を上げていく構造となっている。将来的には、聴解問題の会話場面を増やすと同時に、学習者が主体的に練習したい要素や表現、場面を選択するモジュール型の聴解問題アプリケーションとして提供することを目指している。

本研究は以下の成果の一部である。

平成27年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般))研究課題 平成27年度—平成30年度「地域語によるコミュニケーションを支援する聞き取り学習システムの開発と方法論の構築」課題番号: 15H03218 [研究代表者: 馬場良二]

#### 参考文献

- 秋山正次(1983). 熊本県の方言 講座方言学 9—九州地方の方言— 国書刊行会 pp. 207-223  
 大場理恵子(2016). 現代熊本市方言の発音について 第264回筑紫日本語研究会  
 吉里さち子他(2016). 熊本市における在住外国人の方言使用の実態—方言聞き取り教材作成に向けて—2016 日本語教育学会第1回地区研究集会予稿集 pp. 34-35